



↑「なごミスト」の水滴は女性の化粧が落ちないというほど微細。半屋外および室内で効果は大きい。水と電気があれば持ち運びは自由。園なごミスト設計東京事業所／東京都千代田区神田錦町3・19 中沢ビル4階 ☎03・3219・7777 03・3219・7820



↑家庭用「なごミスト」は直径9×高さ23cm、重量7kg。ノズル2口で12mの空間をカバー。半永久的利用が可。25万円～。

↓写真は東京・六本木ヒルズの例。今、ドラ伊ミストは保育園・病院・駅などの設置が増えている。噴霧する水量はクスノキ林の蒸散量が基準という。



住まう

水で冷やす

水うてや蟬も雀もぬるる程（宝井其角※）

打ち水も日本の夏の風物詩のひとつ。玄関先や坪庭に水を打つことで、その上を通る風は暑気を奪われて涼しさを運んでくる。しつとりと水に濡れた地面がもたらす視覚的な効果も大きいだろう。

日本人にとって水はすべての罪や災いを流し去り、穢れをとりさる浄なるもの。古代においては打ち水を行なうことは神の通り道を清める意味があった。それが客を迎える心遣いを示す美風となり、さらには、夏に涼を呼ぶ実用の知恵としても定着したのである。ところが、打ち水も土の上でこそ有効で、コンクリートの被膜に

覆われた現代の舗装の道では、その効果に疑問符がつく。「昭和のくらし博物館」の小泉和子さんが巻頭の対談（19ページ参照）で指摘したとおり、舗装の上への打ち水は、逆効果になりかねない。

昨年、岐阜県多治見市では、散水車による打ち水でより蒸し暑さがひどくなるという市民の声もあつてとりやめている。江戸文化研究家の石川英輔さんはこう話す。「江戸時代の庶民は、夕方になると、家の前に打ち水をしてから、外に縁台を出して涼んだようです。夕風が立ち始めると、いっそう涼

しく感じられたことでしょう。土地に限りのある現代だからこそ土と緑のある環境を見直したい。蒸散の効果を持つ「打ち水器」

植物が水分を外に放出する蒸散による冷却効果については先にも触れたが（22ページ参照）その効果を現代の科学で商品化したのが、東京理科大学・辻本誠教授のグループが研究開発した「なごミスト」（ドライミスト）。微細な水滴を空气中に噴霧することで、不快なベタつきを感じさせずに、周囲の温度を2～3℃下げる。従来のクーラーに比べれば、消

→庭や玄関先に水を打って地表温度を下げ、涼風を呼び込む打ち水。水に強く、古くは船の材料に使われていた木曾さわらで仕上げた手桶と、木曾ひのきの柄杓は昔ながらの風合い。清々しい香りと木のぬくもりが心地いい。注文製作。手桶1万5750円、柄杓2100円。園よし彦 0120・50・4415

費電力は10分の1以下、使う水の量もわずかで済むという。真夏のクスノキ林の蒸散量を参考にして生まれた「なごミスト」は、自然の森の中に近い湿度、気温を作り出す、現代の打ち水といつていい。

